

方丈記(四)

鴨長明

おほかた、この所に住みはじめし時は、あからさまと思ひしかども、いますでに五年を経たり。仮の庵もやゝふるさととなりて、軒に朽葉深く、土居に苔むせり。おのづからことの便に都を聞けば、この山にこもりゐてのち、やむごとなき人のかくれ給へるもあまた聞ゆましてその数ならぬたぐひ、尽くしてこれを知るべからず。たびたび炎上にほろびたる家、又いくそぼくぞ。たゞ仮の庵のみ、のどけくして恐れなし。程狭しといへども、夜臥す床あり、昼居る座あり。一身を宿すに不足なし。かむなは小さき貝を好む。これ事知れるによりてなり。みさごは荒磯にゐる。すなはち人を恐るゝが故なり。われまたかくのごとし。事を知り世を知れば、願はず、わしらず。たゞしづかなるを望とし、うれへ無きを楽しみとす。

惣て世の人のすみかを作るならひ、必ずしも事の為にせず。或は妻子、眷属の為に作り、或は親昵、朋友の為に作る。或は主君、師匠、及び、財宝、牛馬の為にさへこれを作る。われ今、身の為にむすべり、人の為に作らず。故いかんとなれば、今の世のならひ、此の身のありさま、伴ふべき人もなく、たのむべき奴もなし。縦広く作れりとも、誰を宿し、誰をか据ゑん。

夫、人の友とあるものは、富めるをたふとみ、懇ろなるを先とす。必ずしも情あるとすなほなるとをば不愛。只糸竹、花月を友とせんにはしかじ。人の奴たるものは、賞罰はなはだしく、恩顧あつきを先とす。更にはぐゝみあはれむと、やすくしづかなるとをば願は

ず。只わが身を奴婢とするにはしからず。いかゞ奴婢とするとならば、若しなすべき事あれば、すなはちおのが身をつかふ。たゆからずしもあらねど、人を従へ、人をかへりみるよ
りやすし。若し歩くべき事あれば、みづから歩む。苦しといへども、馬鞍、牛車と心を悩ま
すにはしからず。今一身をわかつて、二の用をなす。手の奴、足の乗物、よくわが心にな
へり。心身の苦しみを知れば、苦しむときは休めつ、まめなれば使ふ。使ふとても、た
びたび過ぐさず。物うしとても、心を動かす事なし。いかにいはむや、常に歩き、常に働
くは、養性なるべし。なんぞいたづらに休みをらん。人を悩ます、罪業なり。いかゞ他の
力をかるべき。衣食のたぐひ、又同じ。藤の衣、麻の衾、得るにしたがひて肌を隠し、野辺
のおはぎ、峰の木の実、わづかに命をつなぐばかりなり。人にまじはらざれば、姿を恥づ
る悔もなし。糧乏しければ、おろそかなる報をあまくす。惣てかやうの楽しみ、富める人
に對していふにはあらず。只わが身ひとつにとりて、昔今とをなぞらふるばかりなり。
夫、三界は只心一つなり。心若しやすからずは、象馬、七珍もよしなく、宮殿、樓閣も
望みなし。今さびしきすまひ、一間の庵、みづからこれを愛す。おのづから都に出でて、
身の乞匄となれる事を恥づといへども、歸りてこゝに居る時は、他の俗塵に馳する事をあ
はれむ。若し人このいへる事を疑はば、魚と鳥とのありさまを見よ。魚は水にあかず。魚
にあらざれば、その心を知らず。鳥は林を願ふ。鳥にあらざれば、其の心を知らず。閑居の
気味も又同じ。住まずして誰かさとりむ。

抑一期の月かげ傾きて、余算の山の端に近し。たちまちに三途のやみに向はんとす。何

の業をかかこたむとする。仏の教え給ふ趣は、事にふれて執心なかれとなり。今草庵を愛するも、閑寂に着するも、障りなるべし。いかゞ要なき楽しみを述べて、あたら時を過ぐさむ。しづかなる暁、このことわりを思ひ続けて、みづから心に問ひていはく、世のがれて山林にまじはるは、心をさめて道を行はむとなり。しかるを、汝姿は聖人にて、心は濁りに染めり。栖はすなはち、浄名居士の跡をけがせりといへども、たもつところは、わづかに周利槃特が行ひにだに及ばず。若しこれ貧賤の報のみづから悩ますか、はた又妄心のいたりて狂せるか。その時、心更に答ふる事なし。只かたはらに舌根をやとひて、不請阿弥陀仏両三遍申してやみぬ。

于時建曆の二年、弥生の晦日ころ、桑門の蓮胤、外山の庵にして、これをしるす。

方丈記